

冬 戦 争

— 何故、小国の人々は大国の横暴に屈しなかったのか —

Winter War : Why the People in the Small Country Didn't Give Themselves up to the Major Power Being Tyrannical ?

高 田 理 孝

TAKADA Michitaka

I. 背景

第二次世界大戦が勃発する約10日前、1939年8月23日、ヒトラーとスターリンは独ソ不可侵条約を結んだ¹⁾。これに遡ること3年前、日独防共協定が締結されており、独ソ両国は敵対する2大独裁国家という関係にあった。突然のこの不可侵条約はヒトラーから見れば来るべき英仏との対決に備えるための、またスターリンにしてみれば日独との2正面作戦をさけるための方策という意味合いがあった²⁾。この条約は両国外相の名前をとり別名モロトフ・リッペントロップ協定とも言われる。その中には秘密議定書が含まれていた³⁾。それは、独ソによる東欧における勢力圏を決定したものであった。この協定に依れば、ポーランドを中部で分割した後、バルト沿岸地域については、バルト3国（エストニア・ラトビア・リトアニア）及びフィンランドをソ連の勢力圏におくこととなっていた。



ヒトラー, A. (1889~1945)



スターリン, J. (1879~1953)

約10日後、1939年9月1日、ドイツのポーランド侵攻で第二次世界大戦の火蓋が切られた（9月3日、英仏はドイツに宣戦布告をした）。戦前、ドイツ軍を上回る戦力を保持していると信じられていたポーランド軍であるが、ドイツ軍の電撃作戦でその主力が壊滅、さらに17日に開始されたソ連軍のポーランド軍背後からの攻撃によって、1ヶ月後ポーランドは降伏・消滅した。この結果、独ソ両国はブーク河を挟んで国境を接することとなった。

ドイツと英・仏が戦争状態になった状況を利用しつつ、一方でスターリンは第一次世界

大戦で失った旧ロシア領の回復に着手していた。まず、ソ連軍は9月中にバルト3国に進駐した。次いで、10月11日、ソ連外相モロトフはフィンランド交渉団をモスクワに招き団長パーシキヴィに、以下の要求を伝えた。

- ①マンネルヘイム線（カレリア地峡に作られた長さ135km、幅90kmにわたる対ソ防衛線）の撤去。
- ②ヘルシンキから100km、フィンランド最南端のハンコ半島の30年間租借と基地の建設。
- ③フィンランド湾に浮かぶ島々の30年間租借。
- ④カレリア地峡の国境線（レニングラードから32km）をフィンランド側に30km後退させること。

これらの要求だけ見れば、ソ連側の要求の主目的はレニングラード（現サンクトペテルブルク）及びクロンシュタット海軍基地の安全保障を図ることにあるとも考えられるだろう。割譲要求面積は2200平方キロ。交換条件として東カレリア5000平方キロの譲渡を申し出ている。しかし交渉の一方でスターリンは野望—フィンランド全土の征服—を達成すべく、かねてからの計画に従い、大軍をソ・フィン国境沿いに配備した。

交渉を重ねた結果、フィンランド側はカレリア地峡の国境線を10km後退させ、島嶼の割譲を受諾するところまで譲歩した。しかし、ハンコ半島の租借は拒否し、交渉は11月13日決裂した。

この間、フィンランド軍総司令官マンネルヘイム元帥は⁴⁾、モロトフの要求を受諾するよう政府を説得したが、フィンランド政府は聞き入れなかった。元帥は交渉決裂を受け、11月中旬フィンランド軍の動員を命じた。

11月28日、ソ連は1932年に締結したソ・フィン不可侵条約を破棄、30日一方的に対フィンランド攻撃を開始した。

*注)

- 1) この条約の成立は、日本にも衝撃をもたらした。日・独・伊三国防共協定をその外交政策の基本としていた平沼騏一郎内閣は、8月28日総辞職した。
- 2) スターリンに関東軍の実力を認識させたのは、1939年5～9月のノモンハン事件だった。ソ連崩壊後の文書公開で明らかになったのだが、この国境紛争において国境そのものは確保したが、ソ連軍の損害は日本軍のそれを上回った。第57軍団司令官だった第二次大戦の英雄ジューコフ元帥はその長い戦歴の中で最も困難な戦いと回顧している。
- 3) 公式には秘密議定書の存在をソ連は否定していたが1990年12月の人民代表会議において「1939年のソ独不可侵条約の政治的及び法的評価について」という決議が採択され、存在を公式に認めた。



- 4) マンネルヘイム, C.G.E. (1867～1951)。左写真。フィンランド救国の英雄。17世紀スウェーデンに移住したオランダ人がマンネルヘイム家の始祖。その後、18世紀半ば当主が貴族に叙され一家はフィンランドに移住。ロシア領になった後も、フィンランド公国政府で代々重責を担う。自身はロシア軍の騎兵学校に入学し、騎兵将校として日露戦争にも従軍。第一次世界大戦では騎兵中將としてロシア第6騎兵軍団を率いた。

フィンランド独立後の内戦では、白衛軍の司令官として赤衛軍を撃破。その後、大統領選に敗れ第一線から退いたが、31年国防委員会議長に就任、33年陸

軍元帥、39年国軍総司令官となる。ソ連との継続戦争中の43年国家元帥、44年大統領に就任。同年ソ連と講和条約締結。46年引退。51年病氣療養中のスイスで死去。遺体はフィンランドに移送され、盛大な国葬が営まれた。

II. 戦争

冬戦争は大きく2期に分けられる。すなわち、攻撃を受けたフィンランド軍が優勢な内に戦いを展開し、戦火は下火となり双方で和平の道を探ることになった第一期(1939.11.30~1940.1月初旬)、そして1ヶ月の中休みの後、開戦時に倍する兵力をカレリア地峡に集中し、ソ連軍がフィンランド軍を圧倒、講和に至る第二期(1940.2.10~3.13)である。

1. 第一期(フィンランド軍の奮戦)：11月30日~1月初旬

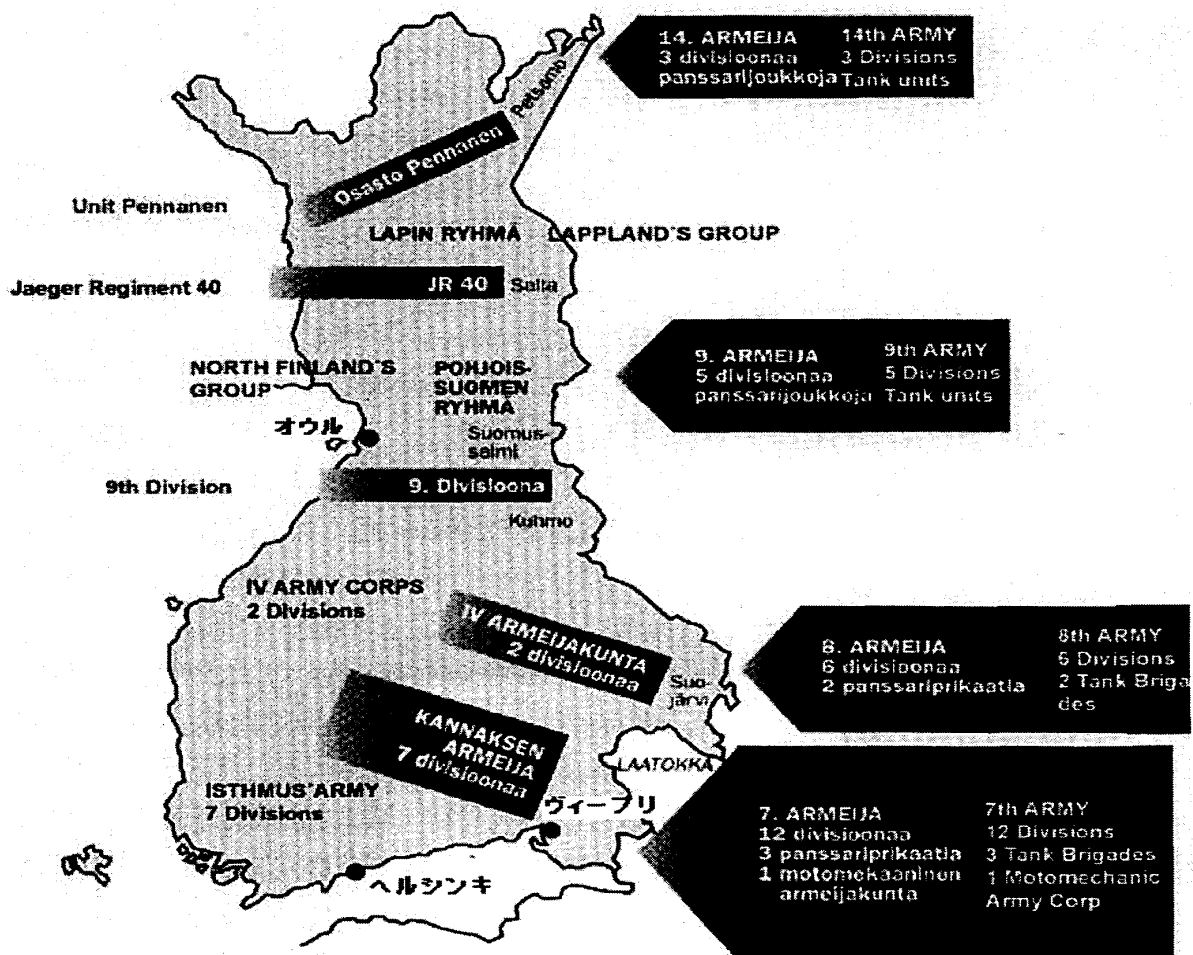


図1. 冬戦争概略図

11月30日、レニングラード軍管区司令官メレツコフ大将率いるソ連軍は23個師団45万名、砲1880門、戦車2385両、航空機700機でフィンランド全土に対する攻撃を開始した。対するフィンランド軍は12個師団19万名(戦争開始後予備役を大動員し、最終的には約30万名)、砲700門、戦車十数両、航空機134機という戦力であった。

ソ連軍は、カレリア地峡にその兵力の約半分20万人(第7軍)、ラドガ湖北方に約三分の一の13万人(第8軍)、残りを中部地区(第9軍)・北部地区(第14軍)に配置した。そのソ連軍に対して、フィンランド軍はカレリア地峡方面に12万人、ラドガ湖北方に4万人、東部国境線沿いに1万6000人が動員されていた。

ソ連軍は当初戦争は数日で終わると想定しており、冬季戦の準備も不十分な上、弾薬補給も10日前後分しかなかった。また、兵士達は抑圧されたフィンランド人民の解放のため進駐すると教えられていた。そのため、実際の戦闘は起こらないと考えている兵士も数多くいた。

地勢的に言えば、フィンランドはほぼ日本と等しい国土面積であり、その7割が原生林、1割が湖沼、人口は当時320万人であった。そのため、開発の進んだ南部を除き、交通網は人口希少な原生林と湖沼の間を縫う数少ない道路に依存する状態であった。開戦後、多数のソ連軍部隊が、各方面で湖沼と原生林の間を通る狭隘な道路に殺到した。この年12月は比較的暖かく湖沼は凍結しておらず、他方で降雪は2m程度になった。そのため、機械化されていたソ連軍も自由に身動きができない状態となった。また、圧倒的な戦力を誇る空軍の支援も悪天候のため期待できなかった。12月20日以降気温は急低下、夜間マイナス40℃に達し、冬期戦用装備不十分なソ連軍を苦しめることになった。それに対し、フィンランド軍は地の利を生かし、スキーで自由に移動し神出鬼没のゲリラ戦を展開した。ソ連軍の進撃速度は各方面で1日に10kmにも満たなかった。フィンランド軍はソ連軍の隊列の先頭と最後尾をまず攻撃、身動きがとれなくなった部隊を攻撃した。そして、寸断された各部隊を森林の開けた地域に包囲、時間をかけ殲滅する「モッティ戦術」を展開し、ソ連軍を各地で撃破した。

この時期の戦況を4つの地域に分け、さらに詳細に見てみよう。

a) カレリア地峡

主戦場となったカレリア地峡には、約20年の歳月をかけ作られた防衛ライン、マンネルヘイム線が存在した。国境から太い黒い線で示した主要塞線およびヴィープリの最終防衛戦までがそれである。約1400のトーチカと440kmに及ぶ塹壕それにキヴィと呼ばれる氷河の漂石を使った対戦車障害から構成されていた。構築には一般市民も休暇を使って参加した。主要塞線は5つに区分されスンマ地区は特に強力だった。この方面のフィンランド軍兵力はエステルマン大将率いる2個軍団6個師団12万人だった。

ソ連第7軍はヤコレフ大将が指揮し、歩兵19万、砲・迫撃砲900門、戦車1400両、航空機700をもって攻撃を開始した。その使命はマンネルヘイム線を突破して、フィンランド第二の都市、ヴィープリを占領することであった。重装備に乏しいフィンランド兵は火炎瓶と集束爆薬それに少数の対戦車砲で戦車に立ち向かった。第一次世界大戦型の塹壕戦に巻き込まれたソ連軍は、12月6日、開戦から一週間経って、遅滞防御線を突破し漸くマンネルヘイム要塞線に辿り着いた。そして、15日ラドガ湖畔のタイパレ地区で総攻撃に出た

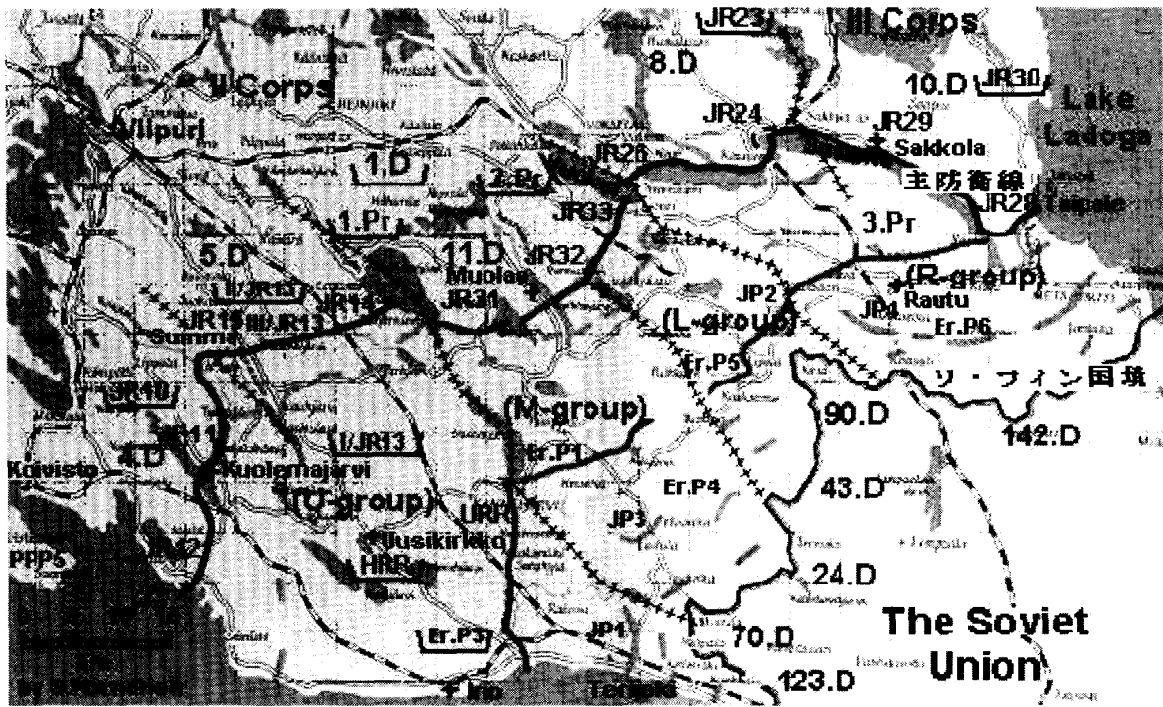


図 2. カレリア地峡要図 (Korhonen,S. 2004)

が、3日間の攻撃後退却を余儀なくされた。また、防衛線の最弱点であると誤認したスンマ地区でも5日間の攻撃後13日に一旦退却した。しかし、17日になってT26やBT7のような軽戦車だけでなく、試作中の重戦車(KV-1)まで動員して、スンマからムオラに至る地区で再度総攻撃を開始した。激戦になったが、対戦車障害で立ち往生したソ連軍戦車はフィンランド軍の餌食になった。ソ連軍は昼間攻撃をあきらめ夜襲に切り替えたが、フィンランド軍の探照灯照射と機関銃の弾幕の前に莫大な損失を被り22日攻撃中止に至った。23日フィンランド軍の反撃が始まったが、ソ連軍により食い止められ、結果として戦線は安定した。

12月14日、ソ連は世界中から非難を浴び、国際連盟を追放された。

b) ラドガ湖北方

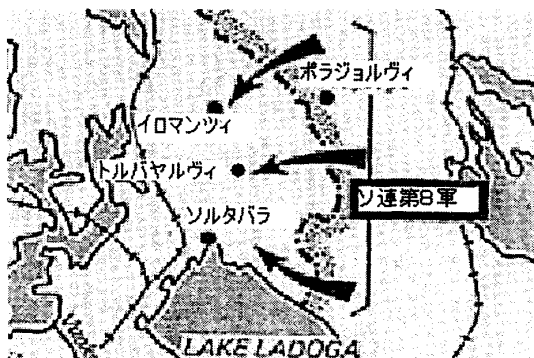


図 3. ラドガ湖北方地図

ラドガ湖の北のトルバヤルヴィ・ソルタバラ地区では、ソ連第8軍(ハバロフ少将)が歩兵13万人、装甲車輛400両、砲600門で攻撃を開始した。開戦後、マンネルヘイム元帥は第8軍の進撃に対応し、かねてから信頼していた予備役のタルヴェラ大佐を招集、総司令部予備から兵を与えタルヴェラ戦闘集団を形成。ヘグルンド少将(39年末、ヘイスカネン中將に交代)率いる第4軍団4万人が守備するソルタバラの北方トルバヤルヴィ地区に派遣した。

ソ連第8軍の使命はラドガ湖の北を回ってカレリア地峡背後を衝くと共に、一部はそのまま内陸に向かって進軍することであった。当初この方面の進撃は比較的快調であった。

しかし、部隊相互の連携が十分でなく、第8軍の5個師団と1個機甲旅団は分散して進撃することとなった。トルバイルヴィに派遣されたタルベラ戦闘集団はスキー奇襲隊による夜襲によって第139師団、第155師団の進撃を食い止めた。これに対し、ソ連軍は予備の第75師団まで投入した。しかし、絶え間ない奇襲と待ち伏せ攻撃に遭い、第139師団と第75師団は壊滅、戦線は12月22日までに膠着状態となった。

また、ラドガ湖北岸をソルタバラ方面に進撃していた第168師団、第18師団、第56師団および第34機甲旅団にはフィンランド第4軍団がスキー奇襲隊によって反撃に出た。その後、第4軍団は、モッティ戦術で第8軍の各個撃破に成功した。さらに、撃破したソ連軍の第18・168の両師団と第34機甲旅団を10個の包囲陣に分断。包囲は2月中旬まで続き、これらの部隊は壊滅した。

c) 北部戦線（最大の危機と雪中の奇跡）

ドゥハノフ中将率いる第9軍は南から第54師団がクフモに、第163師団と控置の第44師団からなる部隊がスオムッサルミに、第122師団がサッラにそれぞれ分かれて進撃する事になっていた。部隊が三手に分かれているのは、この地域は道路がまばらであるからであった。しかし、同方面はフィンランド中央部に位置し、ソ・フィン国境とボスニア湾との距離が最も近かったため、第54・163の両師団はそれぞれ割り当ての地域を占領後、ドイツ流の電撃戦を展開し、そのまま内陸に向かって進撃後、オウルに到達し、フィンランドを南北に二分することになっていた。

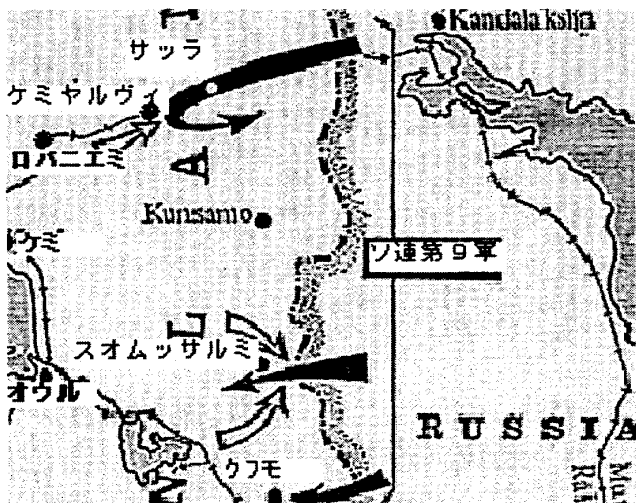


図4. スオムッサルミ地区

同方面ではフィンランド軍はソ連軍の大規模な攻撃があるとは想定しておらず、完全な奇襲となった。すなわち、クフモでソ連の第54師団と対峙したのは第14警備大隊、スオムッサルミでソ連の第163師団と対峙したのは第15警備大隊であった。

この危機的状況に対し、マンネルヘイム元帥は急遽予備役のシーラスポ大佐を招集、第9師団を編成し、オウル経由でスオムッサルミ地区に派遣した。

スオムッサルミの北にあるキアンタ湖西の道路を南下してきた第163師団の進撃はスオムッサルミを占領後、第9師団の反撃で頓挫した。もともと予備でもあり士気が高いとはいえない同師団は12月7日防御態勢に入った。さらに、11日から始まったフィンランド軍の攻撃により、ソ連163師団は分断包囲されてしまった。ドゥハノフ中将は精鋭の第44師団に163師団の救出を命じ、同師団はスオムッサルミの南にあるラーテ林道を通り同地区に進撃した。しかし狭い林道を進軍する機械化された同師団の車両の縦列は長さ20kmにも及び、フィンランド軍のモッティ戦術とマイナス40℃に及ぶ寒気により立ち往生してしまった。

その後、フィンランド第9師団はまず163師団に対し攻勢をかけ12月中に壊滅的な打撃

を与えた。シーラスボ大佐はさらに1月5日第44師団に対する攻勢を開始した。ソ連第44師団は24時間攻勢を持ちこたえたが、翌日退却を決定、重装備を遺棄した軍はパニックに陥り潰走を始めた。そして多くの兵士が深い森の中に入り込み凍死した。その結果、両師団約3万名の内、戦死者2万3千名、捕虜1500名を出し両師団は壊滅した。かくして、フィンランド軍にとってのタンネンベルグ会戦⁵⁾は終わりを告げた。その様子を同行した外国の従軍記者は結果を「雪中の奇跡」として世界に打電した。

また、北極圏のサッラからラップランド地区の州都ロバニエミを目指した第122師団の進撃はケミヤルヴィまで到達したがケミから鉄道輸送されたフィンランド第3師団の反撃に遭い撤退を余儀なくされた。また、クフモを目標とした第54師団の攻勢に対してもタルヴェラ戦闘集団が反撃、膠着状態となった。

*注)

5) タンネンベルグ会戦。第一次大戦初頭、ロシア軍は2個軍(レンネカンブ第1軍、サムソノフ第2軍)30万人をもって、ドイツ領東プロイセンの東部と南部から侵攻した。対するドイツ軍は約半数の兵力の第8軍のみ。ドイツ軍はロシア軍の連携の悪さに着目し、まず南部の第2軍に兵力を集中攻勢をかけた、その結果同軍は戦死・行方不明3万、捕虜9万2000名と壊滅した。ドイツ軍はその後、第1軍に矛先を転じ同軍を国境外へ潰走させた。司令官のヒンデンプルグ元帥は軍神とたたえられ、後に第2代ワイマル共和国大統領に選ばれた。

d) 北極海沿岸

最後に、最北の北極海沿岸には三個師団からなる第14軍(フロロフ少将)が配置された。そのうち第104師団と第52師団はレイパチ半島とバレンツ海への出口であるムルマンスクの安全を確保し、さらにフィンランド側出口のペツアモ港と近郊のニッケル鉱山を占領する目的でフィンランドに進撃した。

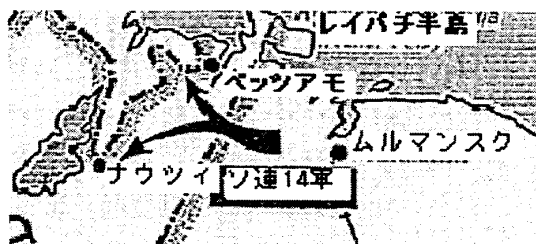


図5. 北極圏地区

フィンランド軍はこの方面からの攻撃を想定しておらず、わずかな兵力しか置いてなかった。圧倒的な兵力差により、ソ連軍の攻撃は順調に進んだ。第52師団は12月18日、ペツアモを占領することに成功した。

しかし、それ以上のフィンランド内陸部への進撃に対しては、ロバニエミ経由でフィンランド第2師団が北上し反撃、この方面でのソ連軍の攻勢は終息した。

2. 中休み：1月初旬～2月9日

この期間、ラドガ湖北部の包囲陣を除き、大規模な戦闘が中止された。これには、両国にそれぞれの事情があった。ソ連側としては、1940年1月初旬までに撃破戦車271両(スオムッサルミ地区を除く)、戦死者約5万名、捕虜6千5百名、という予想外の大損害を被ったからであった。フィンランド側も激しい戦闘で武器弾薬が枯渇してしまった。

この中休みの間、両国では和平をめぐる駆け引きが行われた。しかし、結局交渉は不調

に終わった。1ヶ月間で、ソ連側はカレリヤ地峡において大規模な攻勢準備を行った。まず、総司令官だったメレツコフ大将を第7軍司令官に降格、新たに第13軍（グレンダル大将）もカレリヤ地峡に配置し、北西戦線正面軍⁶⁾を構成した。そして、この正面軍を率いるため、ティモシェンコ上級大将をポーランドから呼び寄せた。この両軍は併せて兵員60万人、大砲4000門、戦車・装甲車2000両、航空機750を装備した23個師団（内2個師団は予備）からなる精鋭だった。ティモシェンコ將軍は、対フィンランド戦における前年の敗因を徹底的に分析、さらにマンネルヘイム線については精巧な模型を作り、攻略法を検討した。また、攻撃開始地点までの道も幅100メートルにわたり、森林を伐採し広げ、大軍の展開を容易にした。

これに対し、フィンランド側もスウェーデン・英・仏・伊などから武器供与を受け、義勇軍の受け入れを行ったが、戦力の強化にはほど遠い状態であった。

ラドガ湖北方戦区でも、包囲されたままの第18・168の両師団と第34機甲旅団を救出すべく、スターリンはハバロフ少将を解任、ノモンハン事件当時ジュコフ中將の上官であり極東軍管区司令官だったシュテルン上級大将を第8軍司令官に任用した。これは、指揮官の階級と統括する部隊の規模を考えれば異例の人事である。また、それと共に寒冷地での戦闘に慣れた第37、93の両師団をシベリヤから転用し、第8軍に加えた。同軍にはこれ以降も新手の3個師団がシベリヤから加わる予定になっていた。

*注)

6) 軍隊の編成において基本的戦闘単位は師団である。2ないし3個師団により軍団が編成され、さらに2ないし3個軍団により軍が編成される。さらに複数の軍を戦略目標に対し一つの司令部が統括する場合、最大の戦闘単位として正面軍（ドイツでは軍集団）が編成される。予備兵力まで含めると、100万人近くの兵員・装備を擁する正面軍・軍集団の形成は戦史でも極めてまれで、第二次大戦中の独ソ両国のケースをのぞけばほとんど無い。

3. 破局（2月9日～3月13日）

2月9日、カレリヤ地峡における大攻勢が開始された。主攻は第7軍の分担地区に置かれ、9個歩兵師団に加え、10個砲兵連隊（それぞれが師団規模の強力なもの）さらに5個戦車旅団をもって、フィンランド第2軍団に襲いかかった。同軍は40kmの狭い正面に攻撃を集中、マンネルヘイム線突破後ヴィープリ占領を目的としていた。第7軍は1週間で主要塞線を突破、最強地点であったスンマ地区も占領した。17日、フィンランド第2軍団（エクイスト中將）は中間防衛線に後退した。しかし、大攻勢を続けるソ連軍は翌18日には中間防衛戦に到達、早くも2カ所で防衛戦を突破した。結局、中間防衛線は2月27日放棄されフィンランド軍に残されたのはヴィープリの最終防衛線だけとなってしまった。

他方、グレンダル大将率いる第13軍のカレリア地峡東部の攻撃はフィンランド第3軍団（タルヴェラ少將）の反撃に遭い、20日には膠着状態となってしまった。戦況にいらだったスターリンは2月末グレンダル大将を解任、バルシノフ大将を後任に据えた。しかし、戦況に大きな変化はなかった。

ソ連第8軍も2月17日ラドガ湖北方で、攻勢を開始した。しかし、この地区ではフィンランド第4軍団（ヘイスカネン中將）は攻勢に耐え、包囲していた2個師団と機甲旅団に

対し逆に攻撃をかけ19日には殲滅した。この結果、休戦発効まで包囲陣を含むラドガ湖北方戦線において、それ以降大規模な戦闘は止んだ。

主攻を務めるソ連第7軍は、本来第8軍用の援軍だったシベリヤからの3個師団を補充され、3月1日南と東からヴィープリを包囲、さらに凍結したヴィープリ湾を通り西方からも同市を包囲し始めた、そして3日にはヴィープリは完全に包囲された。しかし、フィンランド軍は良く防ぎ、市街地へのソ連軍の突入を停戦発効まで食い止めた。

2月末から始まっていたソ連・フィンランド間の交渉は、3月8日正式な停戦交渉となった。停戦に至る経緯において次のような要因が働いていた。すなわち、フィンランド政府の一部は英仏の正規軍派遣に期待をかけ戦争継続を主張したが、マンネルヘイム元帥はじめ軍首脳は戦力を残している状況での和平を強く望んだ。また、ソ連にしても、雪解けの時期に至れば泥濘の中で軍の動きがとれなくなるという懸念があり、英仏の介入の可能性も完全には払拭され得なかった。従って、出血の多い戦争をいつまでも継続するわけにはいかなかったのである。

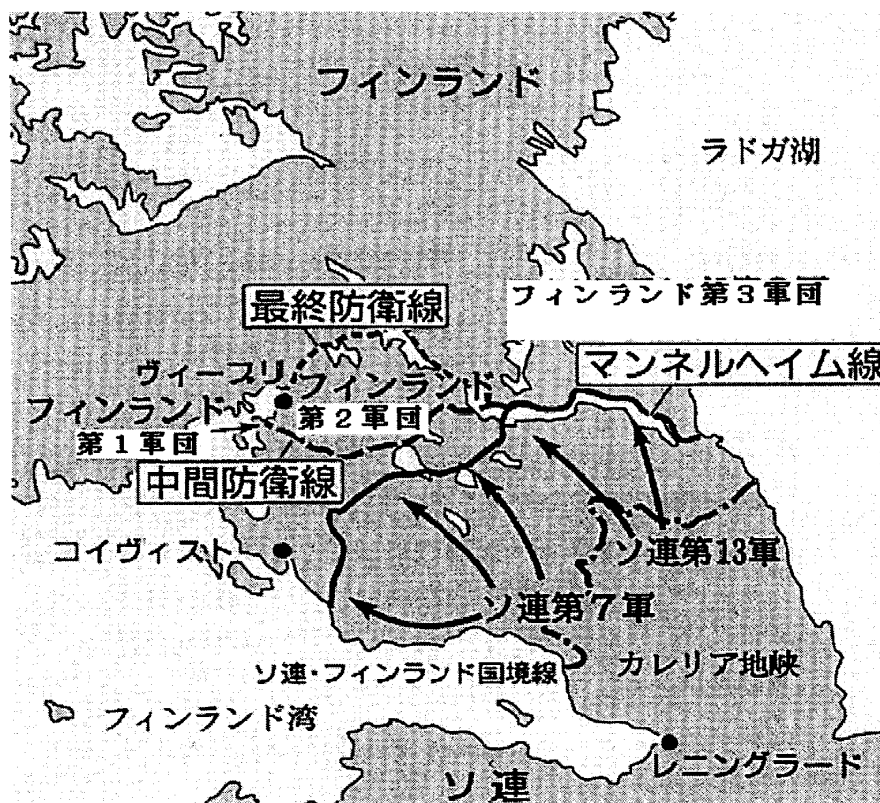


図6. ティモシェンコ攻勢

4. 停戦

3月13日の停戦条約は、フィンランドに過酷な結果をもたらした。フィンランドはカレリア地峡・極北のレイパチ半島など国土の10%、そしてフィンランド第二の都市ヴィープリをソ連に奪われ、全人口の12%が難民となった。さらにフィンランド湾を押さえるハンコ半島もソ連の租借地となり要塞化された⁷⁾。この惨状はフィンランド国民にソ連に対する恐怖心と敵愾心をかき立て、新たな戦争(継続戦争)⁸⁾の火種となった。

双方の損害は、ソ連軍についていえば戦死・戦病死者13万人、戦車・装甲車の喪失車両数1600両、航空機の喪失数は500に上った。他方、フィンランド軍の損害は戦死・戦病死

者2万1千名、喪失航空機は62であった。この数字は、戦争の後半を含め如何にフィンランド軍が善戦したかを物語っている。

*注)

7) この結果にソ連は決して満足していたわけではない。40年11月のヒトラー・モロトフ会談において、モロトフは先の独ソ不可侵条約に基づいてフィンランドを完全に自国領土に編入することを要求した。これに対し、ヒトラーは冬戦争中のフィンランドを見殺しにする態度を一変、既に膨大な軍事援助を同国に行っており、モロトフの要求を拒否した。この会談の決裂は極めて大きな世界史的意味を有していた。すなわち、ヒトラーをして最終的に対ソ戦の決断をせしめることになったのである。

8) 継続戦争(1941.6.26～44.9.19)。独ソ戦の開始と共にフィンランドもドイツ側にたって参戦。8月末までに冬戦争以前の国境を回復し、オネガ湖まで進撃。しかし、それ以上の攻勢はとらず、2年半北方からソ連に圧力をかけるにとどまった。44年になって、攻勢に転じたソ連軍は45万人の兵力でカレリア地峡・ラドガ湖方面で対フィンランド攻撃を開始。フィンランド軍はドイツ軍の協力で冬戦争当時の防衛線に退却し防衛戦を展開したが、9月19日冬戦争に倍する過酷な条件で休戦協定を結んだ。その結果フィンランドはその後91年のソ連崩壊まで50年近い間対ソ従属的なフィンランド化と呼ばれる外交政策をとることとなった。

Ⅲ. 何故、フィンランド国民はソ連に屈しなかったのか

ここでは、フィンランド(国民)が、1. 何故戦ったのか、2. 何故善戦できたのか、3. 戦いは何を教訓としてフィンランド国民に残したのか、の3つに分けて考えてみたい。

1. 何故戦ったのか

まず国家レベルでいえば、1918年の独立に際し、ボルシェビキに支援された赤衛軍と共和派の白衛軍が1年間にわたり内戦を行った苦い経験を味わっており、ソ連に対する警戒心は強かった。そのため、フィンランドは1932年ソ連との間に不可侵条約を締結したが、独立早々からカレリア地峡に要塞線を構築し続けた。また、国力の圧倒的な違いから、ソ連との戦いは極力避けようとしたが、戦火を交える場合には相手に痛手を負わせる覚悟であった。特に軍首脳でその姿勢は一貫しており、マンネルヘイム元帥は最後までソ連との外交交渉に望みを託し、平和裏に緊張関係の解消をすることを希望していた。同時に、他国の援助に期待をかけることなく、やむなく戦端を開いた後も、緒戦で快勝を納めたにもかかわらず、早期の和平を政府に働きかけた。

それに対し、フィンランド政府首脳は、事態を正確に把握していたとは言い難く、その対応も迷走気味だった。すなわち、国際政治の冷徹さー独ソ不可侵条約における秘密議定書の存在、国際連盟の無力さなどーを読み誤り、11月の交渉決裂が直ちに戦争に結びつくとは予想しなかった。他方、思いがけない冬戦争緒戦の勝利を過大評価し、またフィンランドに同情的な西欧諸国(英・仏・伊)の軍事援助に過大な期待をかけ、40年1月中の有利な状況での講和を逃してしまった。実際には、英仏はスウェーデン経由で軍事顧問団の派遣を計画していたが、ヒトラーがスウェーデンに圧力をかけ、阻止してしまったのである。

従って、国家レベルで見れば、冬戦争を通じフィンランド政府は大国間の駆け引きに翻

弄され続けた。ただマンネルヘイム元帥を始めとする軍首脳は、彼我の戦力差を痛感しており、また実際に戦争になれば他国の援助は宛に出来ないことを知っていたと言える。

国民レベルで見た場合はどうなるだろうか。国民性は気候・風土、歴史により形成されるところが大である。フィンランドは国土の4分の1が北極圏に属し、7割が森林に覆われ、1割が湖、地下資源にも乏しいという各種産業の展開を含め、人間が居住するには、極めて厳しい自然の下にある。さらに、冬戦争当時の人口は350万人（現在は520万人）と国土の面積（冬戦争当時39万平方キロ）からすると極めて人口密度も低かった。これらの理由から国民は一般に、忍耐力に富み、独立心が強かった。歴史的には、1918年に国家として初めて宗主国だったロシアから独立した。国民それぞれの、国家に対する思いは極めて大きなものがあった。

なお、19世紀末 Topelius,Z. (1875) は「フィンランド読本」で、フィンランドの国民性を以下のようにまとめている (Matsumura,K. 2004)。

- ①勤勉で、持久力がある
- ②鍛えられた頑健な身体を持つ
- ③辛抱強く献身的
- ④温厚で平和を愛する
- ⑤勇敢で必要とあらば戦争も辞さない
- ⑥粘り強く頑固
- ⑦忠誠心が強い
- ⑧おっとりしている
- ⑨自由を愛する
- ⑩知識欲が旺盛

2. 何故善戦できたのか

その原因はフィンランド軍とソ連軍の双方に求められるであろう。

まず、個々のフィンランド軍将兵の練度は極めて高いレベルにあり、特にその狙撃能力は世界一と言われていた。また、国民の9割がノルディック・スキーに親しんでおり、兵士はスキーの名手でもあった。このため、全土が雪で覆われる冬季のフィンランドにおいて、フィンランド軍は森林の中をスキーで自在に移動し、ソ連軍に対する確な狙撃を行い風のように消え去ることが出来た。さらに、一旦ソ連軍の部隊を分断包囲した後は、強固な包囲陣を形成し、自身も厳しい気象に耐え、敵を殲滅するまで戦い続けた。また実戦に際しては、雪の中にとけ込む白いスモックの偽装、厳寒時銃器の凍結を防ぐため潤滑油を塗らないなどの、気候・風土に適した工夫を様々に行っていた。

それに対し、ソ連軍はいくつかの弱点を内包していた。⁹⁾ 確かに早くから軍需優先の産業政策をとることにより、39年の時点で世界でも最も多くの戦車・航空機・重砲を有していたが、1937～38年のスターリンによる赤軍大粛清により、赤軍の理論的指導者・英雄トハチェフスキー元帥を始め赤軍の中核たる高級将校の65%が消滅していた。そのため、ソ・フィン戦の前半において、作戦計画は十分練られたものとは言い難かったし、実戦での指揮も混乱していた。また、フィンランドに対する過小評価の故に、投入されていた兵力には予備師団が混じっており、必ずしも第一線級のものではなかった。さらに、ナポレオン戦争以来ロシア軍は冬季戦に強いというイメージがあったが、フィンランド軍が有していたような冬季戦に関する知識はほとんど伝承されておらず、戦死の原因のかなりの部分が凍死という惨状を引き起こした。

しかし、高価な授業料であったが、この教訓は41年に勃発した独ソ戦に生かされることになる。すなわち、短期決戦を想定していたドイツ軍の進撃を開戦半年後の厳寒のモスクワ前面で阻止し、ソ連軍が反撃に転じたとき、それはフィンランド軍の戦い方そのものだったのである。

*注)

9) そもそも開戦時期一つとってもソ連側に油断があったとしか考えようがない。圧倒的な空軍力と機甲兵力を生かそうとすれば天候が初夏に向かう5月中旬以降が最も開戦時期としては適切だった。

3. 何を教訓としてフィンランド国民に残したのか

奮戦の甲斐無く、当初の要求よりもさらに過酷な要求を呑む形でフィンランドはついに講和条約を結んだ。しかし、もし戦わずして講和した場合、バルト3国のように併合され、戦後もソ連邦内の共和国にとどめられたかもしれない。自らも高価な犠牲を払い、ソ連に莫大な出血を強いたことが独立の維持に結びついた可能性は大である。

それでは、冬戦争はどのような教訓をフィンランド国民に残したのであろうか。これについては、フィンランド国防大学の上席研究員 Ries, T. (2001) が以下のようにまとめている。

- ①独立の維持：降伏ではなく講和を結んだことにより、独立の維持が出来た。
- ②結束：共通の敵ソ連の存在によって、内戦時に対立した共和派と共産主義者の敵意、フィンランド系住民とスウェーデン系住民の緊張関係が解消された。
- ③現実主義：国際政治に対する幻想を取り去った。国際連盟もヨーロッパ諸国も侵略には無力だった。
- ④自信：気候・風土を味方につけ、効果的な防衛戦を展開できたことはフィンランド国民に深い自信を与えた。これは、北欧4国の中でフィンランドのみが経験した事柄である。
- ⑤国際的信頼性：フィンランドの奮戦は同国に対する国際的な信頼感を醸成した。また戦争で与えた多大な損害はソ連に対する無言の抑止力となり、独立の維持につながった。

いずれにせよ、この戦争がフィンランド国民に国家安全保障に関する貴重な教訓を与えたのは確かである。

最後に、現在でもフィンランドでは12月になると必ず冬戦争を描いたフィンランド映画「冬戦争（原題：Talvisota）」を、放映するそうである。

(本論文は、昨年10月本学で行われたフィンランド月間で、著者が行った講演「フィンランドの自然と歴史」の一部「冬戦争」を取り上げ加筆したものです。)

参考文献及びURL

文 献

- Carrell, Paul 1963 UNTERNEHMEN BARBAROSSA (『バルバロッサ作戦』松谷健二訳 (フジ出版社, 1971年/学習研究社, 1997年))
- Glantz, D.M. & House, J.M. 1995 When Titans Clashed (『[詳解]独ソ戦全史』守屋 純 訳, 学習研究社 2003年)
- 半藤一利 1998 ノモンハンの夏 文藝春秋
- 星川 武 (編) 2004[歴史群像]欧州戦史シリーズ 特別編集 図説・ヨーロッパ航空戦大

全 学習研究社

石垣 泰司 2000 戦後の欧州情勢の変化とフィンランドの中立政策の変貌 外務省調査
月報 200/No.2

Liddell Hart, B.H. 1930 HISTORY OF THE FIRST WORLD WAR (『第一次世界大戦』

上村 達雄 訳 (フジ出版社, 1976年/中央公論新社, 2000年))

Liddell Hart, B.H. 1970 HISTORY OF THE SECOND WORLD WAR (『第二次世界大戦』

上村 達雄 訳 (フジ出版社, 1978年/中央公論新社, 1999年))

Maser, W. 1994 Der Wortbruch (『独ソ開戦[ヒトラーvs.スターリン 盟約から破約へ』

守屋 純 訳 2000年 学習研究社)

中村 雅夫 (編) 1997[歴史群像]欧州戦史シリーズVol.1 ポーランド電撃戦 学習研究社

Strobinger, R. 1990 Stalin enthauptet die Rote Armee. Der Fall Tuchatschewskij. (『赤軍大粛
清』守屋 純 訳、学習研究社 1996年)

Tammisaaren Kirjapaino 2005 The Mannerheim Museum Baron C.G.E.Mannerheim,
Marshal of Finland, and his home

Tuchman, B.W. 1962 The Guns of August (『八月の砲声』 山室まりや 訳 筑摩書房,
1965年)

梅本 弘 1989 雪中の奇跡 大日本絵画

梅本 弘 1999 流血の夏 大日本絵画

URL

<http://www.euronet.nl/users/wilfried/ww2/network/nat-flag1.gif>

<http://www.sodatkuvina.cjb.net/TalvisotaMain.htm>

http://www.sodatkuvina.cjb.net/images/Talvisota/Kartat/Talvisota_Kartat_cat.html

http://www.mil.fi/perustieto/talvisota_eng/timer-3.html

<http://virtual.finland.fi/netcomm/news/showarticle.asp?intNWSAID=25937>

<http://www.winterwar.com/index.htm>

http://www31.ocn.ne.jp/~kmatsum/sisu/sisu_3.html